

相互依存的甘えと思いやり, 屈折した甘えと自己愛的傾向

玉 瀬 耕 治・相 原 和 雄*

奈良教育大学学校教育講座 (発達心理学)

(平成17年5月2日受理)

Interdependent Amae and Sympathy versus Distorted Amae and Narcissism

Koji TAMASE and Kazuo AIHARA*

(Department of Psychology, Nara University of Education, Nara 630-8528, Japan)

(Received May 2, 2005)

Abstract

Using a multi-dimensional *Amae* scale developed by Tamase and Aihara (2004), the relationships between interdependent *Amae* and sympathy, and distorted *Amae* and narcissism were explored. Seventy male undergraduates and a hundred and thirty-seven female undergraduates served as the subjects. They were instructed to rate each item of the four Likert-type rating scales: the multi-dimensional *Amae* scale, the sympathy scale (Uchida & Kitayama, 2001), the trust scale (Amagai, 1995), and the narcissism scale (Okada, 1999). As expected, it was found that (a) there was a significant correlation between interdependent *Amae* and sympathy ($r=.53$), and also (b) there was a significant correlation between distorted *Amae* and narcissism ($r=.50$). Multiple regression analyses revealed that sympathy was relatively well explained by interdependent *Amae* ($\beta=.49$), while the egocentrism factor in narcissism was well explained by distorted *Amae* ($\beta=.53$). These results were discussed in line with Doi's *Amae* theory and multicultural perspective.

Key Words : interdependent Amae, sympathy, distorted Amae, narcissism

キーワード : 相互依存的甘え, 思いやり, 屈折した甘え, 自己愛傾向

1. 問題と目的

「甘え」の問題は, 土居健郎が『『甘え』の構造』(土居, 1971)で取り上げて以来, 日本人の対人関係やパーソナリティ, 精神病理を理解する上での鍵概念として, さまざまな視点から論じられてきた。土居 (1971) は「甘え」の定義として, 「甘えの心理は, 人間存在に本来つきものの分離の事実を否定し, 分離の痛みを止揚しよ

うとすることである」(p.82)と述べた。この定義ははなはだ曖昧で難解であるため, 多くの議論を招くこととなった (北山, 1999; 竹友, 1988; 竹友, 1999; 李, 1982)。そのような経緯もあって, 土居 (2001) は「甘え」を再定義し, 「対人関係において, 相手の好意をあてにして振舞うことである」(p.65)とした。一般に甘えとは, 他者に愛され, 他者と一体になろうとする欲求や感情のことであり, 子どもが親, 特に母親に接する態

* 天理市天理小学校

度や行動をさす場合が多い。しかし、土居は「甘え」を日本語固有の語彙であるとした上で、母子関係だけでなく、大人同士の対人関係においても広く当てはまるものとみなした。

この「甘え」理論は、その概念が曖昧であるがゆえに、実証的研究はなかなか進まなかった。しかし、甘えを理解することは、日本人の対人関係や行動様式の特徴を理解する上できわめて重要であり、「甘え」の実証的研究はカウンセリングや心理臨床の実践にも有益な示唆を与えうるものと考えられる。臨床的には、甘えを自覚することに重要な意味があるように思われる。

土居(2001)のいう「甘え」には、「健康で素直な甘え」と「屈折した甘え」がある。まず、健康で素直な甘えとは、「相手との相互的な信頼を軸にした甘え」である。このような良好な関係に根ざした「甘え」は自然発生的であり、無自覚的である(土居, 1971, 1985, 1997, 2001)。「屈折した甘え」については次のように考えられている。人間は甘えたくても甘えられない状況に陥ると、うらむ、ひがむ、ひねくれるなどの感情をいだく(土居, 1971)。これが屈折した甘えであり、一方的な要求の形をとった自己愛的な甘えになりやすい(土居, 2001)。

現代の日本人にとって、甘えという言葉はどのような意味をもつであろうか。例えば「あの人は甘えている」とか「あなたの考えは甘い」などのように、日常的に用いる甘えという言葉は、あまり好ましくない状態を表すことが多い(土居, 1998; 大元, 1985; 篠原, 1997)。文化のあり方として、東洋と西洋にはかなり本質的な違いがあるように思われる。Markus & Kitayama (1991)によれば、日本を含む東洋は相互協調的自己観による文化をもち、西洋は相互独立的自己観による文化をもつとされている。相互協調的自己観の文化とは、人間同士の関係性の上に自己が存在するような文化である。相互独立的自己観の文化とは、個人の尊厳や権利が守られ、確固たる自己を築くことが重要であり、その上に人間同士の関係性が成立するような文化である(北山・唐澤, 1995; 北山・宮本, 2000)。相互協調的な人間関係を基盤とする日本においては、相互独立的な価値観をもつ欧米に比べて、特に甘えが発達しやすいと考えられる。

1. 1. 甘えの実証的研究

「甘え」に関する実証的研究は藤原・黒川(1981)によって初めて行われたとみなされている。彼らは「甘え」の計量化を目的として、「甘え」を測定するための一次元尺度を作成した。彼らはいかなる対象に対して、どのような状況のもとで、甘えがもっとも表出されやすいかを調べた。「甘え」を表す言葉として10語の動詞(あてにしたい、たのみにしたい、すがりたい、まかせ

たい、相談したい、甘えたい、何とかして欲しい、言わなくても分かって欲しい、慰められたい、後押しをして欲しい)を用いた。その結果、①両親よりも恋人や親友に対する甘えの方が強く、②男性よりも女性により多くの甘えがみられた。③家庭では、両親や兄弟姉妹に対して甘えがもっとも表れやすく、個人生活では、恋人や親友に対して甘えが表れやすいことが示された。

この研究は「甘え」を尺度化したことで、その後の研究を促進する重要な契機となった。以降の「甘え」の実証的研究は、次の二つの形のいずれかをとるようになる。一つは「甘え」の一般的なイメージや概念についての検討である。山口(1999)や竹友(1988)は、日常語としての甘えに注目することで、土居の「甘え」を批判した。そこでは「甘え」についての一般的な認識を考えるところが出発点となっている。もう一つは「甘え」と他の概念との関係の検討である。実証的研究の多くは、土居や竹友の理論と藤原・黒川(1981)の結果をもとにオリジナルな甘え尺度を作成し、各々の専門分野に関連する事柄と、「甘え」との関係を検討するという形で進められてきた。

甘え概念を検討した研究としては、大元(1985)が挙げられる。大元は大学生に対して、「甘える」という語に対するイメージを論述させ、一般的に「甘える」という語は良いイメージをもっていないことを示した。その後、高松・加藤(2001)も「甘え」、「甘える」、「甘えさせる」という語句における素朴概念を検討しているが、結果は大元(1985)と類似している。これらの研究は、一般的には「甘え」や「甘える」という語があまり良いイメージを与えていないという点で一致している。

「甘え」と関連する概念との関係に関する研究もいくつか挙げられる。田村・小川(1989)は土居の理論をもとに作成した「甘え」を表す語を刺激語として用い、記憶方略の実験を通して「甘え」と自己受容との関連を検討した。その結果、自己受容の高い人は甘え意識に対してもうまく付き合えており、低い人はそうではなかった。このような記憶実験の手法を用いた「甘え」の研究は稀であり、甘え研究における多様な手法の一つとして興味深い。

内田(1998)は「気がね」と「甘え」の関連性について検討した。彼女は「直接的甘え」、「屈折的甘え」、「とらわれの甘え」、「依存的甘え」、「配慮」の5因子からなる「甘え」尺度を作成している。「気がね」と合わせてボウルビイの愛着理論から導かれた内的作業モデル(IWM)、関係的自己意識との関連を検討した。その結果、「気がね」に対して「甘え」、IWM、関係的自己意識が有意な影響を与えていることが分かった。この研究は藤原・黒川(1981)を参考にして「甘え」尺度を作成しているが、「甘え」尺度5因子のいずれにも有意な性差

が見られなかった点で藤原・黒川（1981）とは異なるものである。

篠原（1997）は土居（1971）などを参考に独自の「甘え」尺度を作成し、「甘え」と自意識との関連における性差、および日本と中国との比較を行っている。彼女は、まず「甘え」や「甘える」という語に対するイメージを記述させ、その結果をもとに6因子構造の「甘え」尺度を作成した。その結果、男性性、女性性を反映する項目において性差が見られた。また「甘え」と自作の自意識尺度との関連を検討した結果、「対外的自意識」（公的自意識）と「受容・承認を求める甘え」因子との間に男女共に有意な高い相関が得られた。なお、中国人学生においては、「甘え」と自意識との間に関連は見られなかった。この結果に関して篠原は、日本人と中国人における甘えの型の違いを問題にしている。

篠原・原崎の一連の研究（1999～2003）では一貫して日本人の方が中国人よりも甘え意識が高いという結果が得られている。しかし中国の子どもは「小皇帝」という言葉に象徴され、「一人っ子政策」に代表されるように、一般的に甘え意識が高いように想像される。このギャップに関して篠原・原崎は中国の儒教精神に答えを求め、中国の子どもが一人っ子で裕福な環境にあったとしても、単に甘やかすには留まらないような子育てが背景にあることを指摘している。しかし玉瀬（2003）は中国を含むアジアからの留学生と日本人学生を比較し、むしろ日本人の方が甘えの得点が低かったと報告している。

高松・加藤（2001）によれば、Kato（1995）は、人が他者との甘え交流をすることを通して、甘え行動・交流に関する内的作業モデルを形成し、それが現在の甘え行動・交流およびその体験（認知・評価・情動）を規定すると捉えた。この研究は、「甘え」のやり取りが双方向的なプロセスであるという見解に立っている。これはそれまで自分から相手へという一方向的な甘えのみで甘えを考えがちであったが、新たに「甘えさせる」という他者から自分への甘えに焦点を当てたものである。これらの考えを受けて、長（2002）は「甘えさせ」が屈折した場合の「甘やかし」と幼児期の「甘え」の関係を検討している。

自分から他者への甘えだけでなく、他者から自分への甘えも捉えた研究として、玉瀬・脇本（2003）が挙げられる。彼らは他者から自分への甘えを「甘えられ」として捉え、藤原・黒川（1981）をもとに大学生用「甘え」尺度を作成した。まず「甘え」項目を作り、その内容を自他逆転させて「甘えられ」項目を作るという方法で「甘え」尺度を作成し、アサーションや自意識との関連を検討した。その結果、「甘え」とアサーションはほぼ独立であり、自意識では「甘え」と公的自意識、「甘えられ」と私的自意識との間に正の相関が認められた。「甘え」と自意識に関しては上述した篠原（1997）の先

行研究がある。しかし「甘えられ」意識に焦点を当て、私的自意識との関連を見出した点は新たな知見を含んでいる。また、アサーションと「甘え」がほぼ独立であるという関係は、両概念が属する文化の違いを際立たせる結果であるといえよう。この点は玉瀬・岩室（2004）によってさらに検討が重ねられている。

玉瀬・相原（2004）は玉瀬・脇本（2003）をもとに、「甘え希求」（素直に甘えたい）、「甘え受容」（甘えを受け入れたい）、「甘え歪曲」（うらみたい、すねたい）、「甘え拒絶」（一方的に甘えたい）の4因子からなる多元的「甘え」尺度を作成し、性格特性5因子（ビッグファイブ）との関連を検討した。特性5因子とは神経症傾向、外向性、開放性、調和性、誠実性の5つである。主な関連性としては、「甘え受容」と外向性、「甘え歪曲」と神経症傾向との間に正の相関が、「甘え拒絶」と外向性、開放性、調和性との間に負の相関が確認されている。「甘え」を性格特性との関連で捉えた点は、新しい視点を示している。

また、この尺度は「甘え希求」と「甘え受容」を合わせて「相互依存的甘え」、「甘え歪曲」と「甘え拒絶」を合わせて「屈折した甘え」としている。「相互依存的甘え」は、土居の「健康で素直な甘え」を捉えようとしたものである。「健康で素直な甘え」が相手との相互関係の上に成り立つと考えたとき、相手に素直に甘え、かつ相手の甘えも受け入れる「相互依存的甘え」は、かなり土居の概念に近いといえるのではなからうか。つまり、玉瀬・相原（2004）の多元的「甘え」尺度は甘えの健康的な側面と不健康な側面の両方を同時に測定できるという点で、「甘え」をより多面的に測定できる尺度であるとみなされる。甘えには「健康で素直な甘え」と「屈折した甘え」の二つがあるというのが土居の甘え理論の中核である。その意味で、一つの研究の中で両方の「甘え」を同時に取り上げることができればより多くの情報が得られるはずである。例えば、「甘え」と関連する概念の検討においても、「甘え」の健康・不健康の両側面に着目して、健康に関わる概念と不健康に関わる概念の両方の関係性を同時に検討するような研究はまだ行われていない。玉瀬・相原（2004）の尺度はそれを可能にするものである。

以上のように、甘えの実証的研究は近年かなり盛んになってきており、今後より精緻な研究の蓄積が期待される。本研究では、甘えの二つの側面に焦点をあてた玉瀬・相原（2004）の多元的「甘え」尺度を用いて「健康で素直な甘え」と「屈折した甘え」を推定し、それぞれに関連する要因について検討する。

1. 2. 本研究の目的

谷（2000）は、内田（1998）の「甘え」尺度を見直

し、「直接的甘え」、「屈折的甘え」、「とらわれ」の3因子からなる尺度を作成し、対人恐怖心性との関連を検討した。その結果、「屈折した甘え」と「とらわれ」との間には中程度の正の相関が見られ、特にとらわれ意識の高い人は対人恐怖的になり易いという結果が示された。「とらわれ」に関しては「甘え」の病理的側面としてのみ捉える必要はないが、「甘え」の病理的な部分と不健康な関係性概念である対人恐怖心性との関連性を実証したことは、土居の甘え理論の裏づけとなっている。

本研究では谷（2000）の結果を参考に、対人恐怖の対極にある「信頼感」との関係を検討する。良好な甘えが良好な対人関係を育むとされるものの、「甘え」と信頼感や不信感との関係を検討した研究はまだ行われていない。甘え研究において、「甘え」と信頼感との関連を検討することは意義があると考えられる。

信頼感の他にはどのような概念を取り上げることが、「甘え」の研究として意味があるだろうか。ここで、「健康で素直な甘え」と「屈折した甘え」の根本的な違いについて考えてみたい。「甘やかす」と聞くと、おそらくは否定的なイメージが湧く。「甘やかす」ことも、土居の「屈折した甘え」の範疇に入るが、その一方で、幼児期に十分に「甘える」体験をしていない者は将来的に依存傾向が強く、「屈折した甘え」をもち易いとされている。つまり他者や子どもを「甘やかす」ことはいけないものの、「甘えを受け入れる」ことは非常に重要だと考えられているのである。「甘えを受け入れる」ことは「健康で素直な甘え」に必要な要素であり、例えば高松・加藤（2001）はこれを「甘えさせる」、玉瀬・脇本（2003）は「甘えられ」と表現した。この「甘えさせる」あるいは「甘えられる」と「甘やかす」ことの違いはどこにあるのだろうか。

土居（1998）は「甘やかす」を「相手が甘えるのを奨励すること」と定義した上で、「甘やかすという行為は甘やかす側の自分自身の内心の満足のためである」と述べている。「相手の甘えを受け入れる」という一見良いと思われる行為も、それが実は自己満足のための行為であるならば「屈折した甘え」になるというのである。これは他の「屈折した甘え」の概念にも共通していえるのではないか。つまり土居の表現する「健康で素直な甘え」と「屈折した甘え」の違いとは、満足する主体が相手と自分の双方にあるか、それとも自分だけにあるかという違いにあると推測される。本研究では、これらの論点を念頭におきながら「甘え」について検討することにした。

「相手のことを考える」という概念として「思いやり」が挙げられる。逆に自分のことしか考えていないという概念として「自己愛」が挙げられよう。土居の甘え理論においては「思いやり」という言葉は見当たらないが、竹友（1988）は「思いやる」という行為を、成人に

おける媚態（他人の機嫌をとろうとしてこびへつらう態度）以外の関わり合いの場において適用される「甘え」の一つの様態であるとしている。このことから、「甘え」と「思いやり」は何らかの関係があると思われるが、そのことを実証的に探究したものはこれまでにない。

「甘え」と自己愛との関係については土居（1971）その他で広く取り上げられており、特にコフートの自己愛理論との関連は数多く指摘されている（一ノ瀬・高木，2002；2003）。しかし、この自己愛に関してもこれまで実証的に「甘え」との関連を示した研究はあまりない。自己愛にも「甘え」と同様に、「健康な自己愛」、「不健康な自己愛」という次元が示唆されているが（小塩，1997）、不健康で病理的な自己愛は、特に「屈折した甘え」とどのような関係にあるのだろうか。これらの点から、「思いやり」と「自己愛」を取り上げることは興味のあることといえよう。

以上のことをふまえて、本研究では「甘え」と信頼感、思いやり、自己愛との関連性を検討することを目的とする。

2. 方 法

2. 1. 調査対象

調査の対象者は大学生207名（男性70名、女性137名）であった。彼らの年齢の平均は20.5歳、標準偏差は3.71であった。

2. 2. 材料

本研究の目的に合わせて、リッカート形式で構成された次の4つの評定尺度を用いた。

2. 2. 1. 多元的「甘え」尺度

玉瀬・相原（2004）が作成した「甘え」尺度で、「甘え希求」、「甘え受容」、「甘え歪曲」、「甘え拒絶」の4因子で構成されている。累積寄与率は45%で、「甘え希求」と「甘え受容」を合わせたものを「相互依存的甘え」とし、「甘え歪曲」と「甘え拒絶」を合わせたものを「屈折した甘え」としている。 α 係数が「甘え希求」 $\alpha = .72$ 、「甘え受容」 $\alpha = .74$ 、「甘え歪曲」 $\alpha = .79$ 、「甘え拒絶」 $\alpha = .80$ である。「相互依存的甘え」は $\alpha = .72$ 、「屈折した甘え」は $\alpha = .79$ であり、内的一貫性は確認されている。また特性5因子との相関によって基準関連妥当性についても検討されている。本調査では4因子にそれぞれ2項目ずつを追加し、計28項目を用いた。評定は「いつもそう思う」（4点）から「全くそう思わない」（1点）までの4段階評定である。

2. 2. 2. 信頼感尺度

高校生について天貝（1995）が作成した尺度を用いた。この尺度は、「自分への信頼」（「私は、自分自身が、信

頼に値する人間だと思う」など),「他人への信頼」(「これまでに出会ったほとんどの人は私によくしてくれた」など),「不信」(「自分で自分をしっかり守っていないと、壊れてしまいそうな気がする」など)の3因子全24項目で構成されている。累積寄与率は42.3%で,「自分への信頼」(6項目) $\alpha = .71$,「他人への信頼」(8項目) $\alpha = .80$,「不信」(10項目) $\alpha = .81$ で内的一貫性が確認されている。また折半法による信頼性係数も.86であり,信頼性は確認されている。妥当性については内容的妥当性,因子的妥当性が検討されている。本研究では調査対象者の回答上の負担を考慮し,「不信」から4項目(「今心から頼れる人にもいつか裏切られるかもしれないと思う」「所詮,周りは敵ばかりだと感じる」「人は自分のためなら簡単に相手を裏切ることができるだろう」「私の地位や立場が変われば,私自身も今とは全く違う人間になるだろう」)を除いた20項目を使用した。評定は「非常によくあてはまる」(6点)から「全くあてはまらない」(1点)までの6段階評定である。

2. 2. 3. 思いやり尺度

内田・北山(2001)が作成した尺度で,1因子22項目で構成されている。累積寄与率は20%であり高くはないが,全体の α 係数は.84であり,高い内的一貫性を有している。また妥当性は情動的共感性と中程度の正の相関を得ていることから,基準関連妥当性が確認されている。本研究ではそのうち,内容の適切性の点から3項目(「情にほだされたくない(R)」「人のつらい話を聞いても心から同情はできない(R)」「一人一人の主張がぶつかることによって傷つく人がいても仕方ないと思う(R)」)を除いた19項目(「つらい思いをしている人のために祈るような気持ちになることがある」「泣いている子どもを見たらついやさしく声をかけたいくなる」など)を使用した。評定は「非常によくあてはまる」(5点)から「全くあてはまらない」(1点)までの5段階評定である。

2. 2. 4. 病理的特徴に基づく自己愛に関する尺度 (以下,自己愛尺度とする)

岡田(1999)が作成した尺度で,「他者からの評価への過敏性」,「自己中心的主体性」の2因子18項目により構成されている。第1因子の「他者からの評価への過敏性」因子(「大事な友だちから怒りを向けられると,自分自身がダメな人間のように感じる」など8項目)については内的一貫性と,既存の自己愛尺度との関連から併存的妥当性が確認されている。「自己中心的主体性」(「欲しいものを手に入れるには,他人を騙さなければならない」「やりたいことは,事の善悪を考えずにやってしまう」など10項目)については信頼性,妥当性は確認されていない。因子構造と信頼性に関しては,本研究で確認する。自己愛を測定する尺度は他にもあるが,より病理的な意味合いの強い自己愛を測定したいという目的

から本尺度を用いることとし,全項目を使用した。評定は「とてもよくあてはまる」(6点)から「全くあてはまらない」(1点)までの6段階評定である。

2. 3. 実施

講義時間の一部を割いて集団法で一斉に調査を実施した。調査は平成15年10月と11月の2回に分けて行った。

3. 結果

3. 1. 尺度の確認

まず多元的「甘え」尺度について原尺度の項目で因子分析を行ったところ,「甘え希求」において1因子にまとまらなかった。そこで追加項目を含めた全28項目を用いて因子分析(主因子法バリマックス回転)を行い,できるかぎり元の尺度に近いところで収まる形を探った。「甘え希求」において,既存の2項目を追加項目と差し替え,他の1項目については削除して4項目とした。また「甘え歪曲」についても既存の1項目をカットして4項目とした。「甘え受容」,「甘え拒絶」に関しては内容の適切性や全体のバランスを考慮して既存の5項目をそのまま用いることとした。表1はその詳細を示したものである。この尺度において,「相互依存的甘え」の α 係数は.80,「屈折した甘え」の α 係数は.79であり,両者の相関は $r = .12$ ($n.s.$)であった。したがってこの2つの尺度はほぼ独立なものとして扱ってもよいといえよう。

次に,信頼感尺度,思いやり尺度,自己愛尺度についても因子分析(バリマックス回転)を行った。因子負荷量の値や α 係数,全体のバランスを考慮して以下の項目を除外した。信頼感尺度では「他人への信頼」から2項目(「私は多少のことがあっても,今の信頼関係を保っていけると思う」「周りのほとんどの人は私を信頼してくれているだろう」)を除外した。思いやり尺度からは3項目(「情にほだされたくない」「人のつらい話を聞いても心から同情はできない(R)」「一人一人の主張がぶつかることによって傷つく人がいても仕方ないと思う(R)」)を除外した。自己愛尺度では「他者からの評価への過敏性」から2項目(「大事な友だちをよるこぼせることができた時は,自分の価値を実感できる」「尊敬する相手から自分が押しのけられるのではないかと心配だ」),「自己中心的主体性」から4項目(「友だちから徹底的にやりこめられたら,相手の言いなりになるだろう」「他人は,自分に公正に接してくれるだろうと思う」「親友と別れても,すぐ新しい友だちを見つけることができる」「自分より強い人に憧れを感じる」)を除外した。

結果として,信頼感尺度では3因子で累積寄与率は43%であった。 α 係数は「自分への信頼」(6項目)で $\alpha = .74$,「他者への信頼」(6項目)で $\alpha = .84$,「不信」

表 1 多元的「甘え」尺度の因子分析表 (バリマックス回転) N=207

変数名					因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	共通性
相互依存的甘え (希求+受容) ($\alpha=.80$)									
4項目									
甘え希求 ($\alpha=.76$)									
・勉強がうまくいかないときは、誰かを頼りにしたくなる。					0.13	0.13	0.24	0.74	0.64
・授業について行けないときは、誰かに助けを求めたい。					-0.11	0.19	0.22	0.70	0.57
・自分がつらいときや悲しいときは、誰かに甘えることも必要だ。(差換え)					0.37	0.17	-0.23	0.57	0.49
・私の気持ちがいけないときは、誰かに慰めてほしい。(差換え)					0.39	0.16	-0.22	0.57	0.51
5項目									
甘え受容 ($\alpha=.80$)									
・友達が将来どの職業につくべきか迷っているときは、自分が相談にのってあげたい。					0.00	0.70	0.00	0.10	0.50
・友達の日常生活に張り合いがなさそうなときは、自分が相談にのってあげたい。					-0.02	0.68	0.09	0.12	0.48
・身近な人の体調が優れないときは、自分をあてにしてほしい。					0.12	0.64	-0.25	0.02	0.42
・親しい人が落ち込んでいるときは、自分が慰めてあげたい。					0.17	0.64	-0.29	0.20	0.48
・友達が勉強で行き詰まっているときは、自分が相談にのってあげたい。					0.06	0.61	-0.24	0.17	0.41
屈折した甘え (歪曲+拒絶) ($\alpha=.79$)									
4項目									
甘え歪曲 ($\alpha=.80$)									
・親しい人が自分の好意に応えてくれないと、すねてしまう。					0.75	0.11	0.15	0.11	0.61
・周りの人が私の努力を認めてくれないと、ふてくされてしまう。					0.74	0.04	0.02	0.15	0.57
・身内にわがままをきいてもらえないと、ふてくされてしまう。					0.64	0.10	0.20	0.18	0.50
・自分の要望が通らないときは、ついつい相手をうらむことがある。					0.58	0.03	0.31	0.00	0.43
5項目									
甘え拒絶 ($\alpha=.68$)									
・自分の考えは周りの人に受け入れてほしいが、周りの人の考えはあまり受け入れたいとは思わない。					0.29	-0.06	0.62	0.03	0.47
・勉強がうまくいかないときは誰かに助けてほしいが、私は誰かから助けを求められたいではない。					0.02	-0.25	0.59	0.16	0.37
・他人には私の気持ちを察してほしいが、自分はそうしなくない。					0.13	-0.15	0.53	0.04	0.30
・他人にはきつい本音を言うことがあっても、他人からは本音をいわれたくない。					0.28	-0.02	0.50	-0.01	0.32
・自分はある程度約束をすっばるかすことがあっても、他人にはそうされたいではない。					0.45	-0.02	0.32	-0.03	0.31
二乗和					2.61	2.37	1.94	1.87	
寄与率					0.14	0.13	0.11	0.10	
累積寄与率					0.14	0.28	0.38	0.49	

表2 多元的「甘え」尺度、信頼感尺度、思いやり尺度、および自己愛尺度における下位因子ごとの相関

	甘え希求	甘え受容	甘え歪曲	甘え拒絶	自分への信頼	他人への信頼	不信	思いやり	他者からの評価 への過敏性	自己中心的 主体性	相互依存的 甘え
甘え希求	1.00										
甘え受容	0.34**	1.00									
甘え歪曲	0.36**	0.13	1.00								
甘え拒絶	0.12	-0.22**	0.45**	1.00							
自分への信頼 (信頼感)	0.05	0.10	-0.08	-0.14*	1.00						
他人への信頼 (信頼感)	0.16*	0.36**	-0.07	-0.24**	0.43**	1.00					
不信 (信頼感)	0.00	-0.09	0.23**	0.25**	-0.05	0.51**	1.00				
思いやり	0.34**	0.51**	0.16*	-0.24**	0.17*	0.51**	-0.17*	1.00			
他者からの評価への過敏性 (自己愛)	0.35**	0.18*	0.41**	0.23**	-0.17*	0.10	0.02	0.38**	1.00		
自己中心的主体性 (自己愛)	-0.04	-0.29**	0.37**	0.48**	-0.17*	-0.35**	0.35**	-0.35**	0.10	1.00	
相互依存的甘え (希求+受容)	0.78**	0.86**	0.28**	-0.08	0.10	0.33**	-0.06	0.53**	0.31**	-0.22**	1.00
屈折した甘え (歪曲+拒絶)	0.28**	-0.05	0.85**	0.85**	-0.13	-0.18**	0.28**	-0.05	0.38**	0.50**	0.12

* $p<.05$ ** $p<.01$

(6項目)で $\alpha = .77$ であった。思いやり尺度の累積寄与率は1因子構造で33%, $\alpha = .84$, 自己愛尺度の累積寄与率は2因子で36%であった。自己愛尺度の α 係数は「他者からの評価への過敏性」については $\alpha = .74$, 「自己中心的主体性」については $\alpha = .65$ であった。

3. 2. 相関および重回帰分析

表2は多元的「甘え」尺度から自己愛尺度までの各下位尺度間の相関を示したものである。「相互依存的甘え」の下位因子である「甘え希求」は「思いやり」と $r = .34$, 「他者からの評価への過敏性」と $r = .35$, 「甘え受容」は「他人への信頼」と $r = .36$, 「思いやり」と $r = .51$, 「自己中心的主体性」と $r = -.29$ の有意な相関が得られている(いずれも $p < .01$)。「屈折した甘え」の下位因子である「甘え歪曲」は「不信」と $r = .23$, 「他者からの評価への過敏性」と $r = .41$, 「自己中心的主体性」と $r = .37$, 「甘え拒絶」は「他人への信頼」と $r = -.24$, 「不信」と $r = .25$, 「思いやり」と $r = -.24$, 「他者からの評価への過敏性」と $r = .23$, 「自己中心的主体性」と $r = .48$, のそれぞれ有意な相関が得られている(いずれも $p < .01$)。「他者からの評価への過敏性」は多元的「甘え」尺度の4因子すべてと正の相関が見られる。

本研究における主な関心は、表2の最下欄2行に示されている「相互依存的甘え」「屈折した甘え」と他の尺度との関係である。「相互依存的甘え」については、「他者への信頼」と $r = .33$, 「思いやり」と $r = .53$, 「他者からの評価への過敏性」と $r = .31$, 「自己中心的主体性」と $r = -.22$ の有意な相関が得られている(いずれも $p < .01$)。「屈折した甘え」については、「他者への信頼」と $r = -.18$, 「不信」と $r = .28$, 「他者からの評価への過敏性」と $r = .38$, 「自己中心的主体性」と $r = .50$ の有意な相関が得られている(いずれも $p < .01$)。これらの結果は想定された傾向とほぼ一致するものであるが、「他者からの評価への過敏性」に関しては「甘え」の2つの側面ともに関連しており、この点については後に考察する必要がある。

「甘え」と信頼感、思いやり、自己愛が互いに関連していることが分かったので、次に重回帰分析を行った。土居の理論から、ここでは「甘え」がより根幹をなす要因であるとみなして、信頼感、思いやり、自己愛を目的変数、「相互依存的甘え」「屈折した甘え」と性別(男性1, 女性-1)を説明変数とする重回帰分析を行った。性の要因を説明変数に加えたのは、「相互依存的甘え」に関して性差(男性: $M = 25.40$, $SD = 4.32$, 女性: $M = 27.65$, $SD = 3.88$, $t = 3.78$, $p < .01$)が認められたからである。

まず、信頼感を目的変数にした場合については、もっとも相関値の高かった「他者への信頼」に関して修正済み R^2 の値が.15であり、「相互依存的甘え」では $\beta = .36$

($t = 5.55$, $p < .01$)、「屈折した甘え」では $\beta = -.23$ ($t = 3.52$, $p < .01$)、の値が得られた。「自分への信頼」と「不信」については修正済み R^2 の値が.1に達していないのでここでは取り上げない。

表3は「思いやり」を目的変数とする重回帰分析の結果を示したものである。この表から、「相互依存的甘え」の β (標準偏回帰係数)の値がもっとも高く($\beta = .49$)、「思いやり」がこの要因によってかなり説明しうることが分かる。表4は「自己愛」を目的変数とする重回帰分析の結果を示したものである。この表から、「他者からの評価への過敏性」「自己中心的主体性」のいずれにおいても、「屈折した甘え」(それぞれ $\beta = .35$ と $\beta = .53$)によってよく説明しうることが分かる。

さらに男女別に同様の重回帰分析を行った。表5と表6はこれらの結果を示したものである。これらの表から明らかなように、男性(表5)では「思いやり」において修正済み R^2 の値が.1に達していないのに対して、女性(表6)では修正済み $R^2 = .37$ で「相互依存的甘え」($\beta = .61$)と「屈折した甘え」($\beta = -.19$)の両方が説明要因となりうることが分かる。「自己愛」の「他者からの評価への過敏性」については、男性では「屈折した甘え」のみが説明要因となりうるが、女性では「相互依存的甘え」($\beta = .31$)と「屈折した甘え」($\beta = -.25$)の両方が説明要因となりうるといえる。「自己中心的主体性」に関しては、男女ともほぼ同じ傾向を示している。すなわち「自己中心的主体性」は、「相互依存的甘え」(負の関係)と「屈折した甘え」(正の関係)の両方で説明できるといえる。

4. 議 論

本研究では大学生を対象にして、「甘え」と関連する諸要因として、信頼感、思いやり、および自己愛を取り上げて検討した。「相互依存的甘え」は他者への信頼感や思いやりと、「屈折した甘え」は不信感や自己愛傾向とそれぞれ正の相関が見られた。また、「相互依存的甘え」に関しては、女性の方が男性よりも有意に高い傾向が見られた。

4. 1. 「甘え」と関連する諸要因との基本的な関係

「甘え」と関連する概念との関係については概ね当初の予想と一致する結果であった。「相互依存的甘え」が他者への信頼感や思いやりと正の関係があり、自己愛的傾向(自己中心的主体性)と負の関係があることが確認された。「屈折した甘え」についてはこれとはほぼ逆の関係にあることも確認された。これらのことから、「甘え」を素直に求めることと「甘え」を受け入れることが健康的な「甘え」であり、他者をうらむ・ひがむ、他者

表3 思いやりを目的変数とした重回帰分析

目的変数	思いやり	
説明変数	β	t値
相互依存的甘え	.49	8.14**
屈折した甘え	-.11	1.97**
性別	-.21	3.58**
決定係数 (R^2)	.33	
修正済み決定係数	.32	
重相関係数	.58	
F値	33.62**	

 β は標準偏回帰係数* $p < .05$ ** $p < .01$

表4 自己愛を目的変数とした重回帰分析

目的変数	他者からの評価への過敏性		自己中心の主体性	
説明変数	β	t値	β	t値
相互依存的甘え	.22	3.50**	-.25	4.22**
屈折した甘え	.35	5.60**	.53	9.23**
性別	-.17	2.67**	.12	1.98*
決定係数 (R^2)	.24		.34	
修正済み決定係数	.23		.33	
重相関係数	.49		.58	
F値	21.39**		34.36**	

 β は標準偏回帰係数* $p < .05$ ** $p < .01$

表5 男性における「思いやり」、「自己愛」を目的変数とした重回帰分析

目的変数	思いやり		他者からの評価への過敏性		自己中心の主体性	
説明変数	β	t値	β	t値	β	t値
相互依存的甘え	.31	2.70**			*-.29	2.72**
屈折した甘え			.53	5.11**	.45	4.32**
決定係数 (R^2)	.10		.28		.27	
修正済み決定係数	.08		.27		.24	
重相関係数	.31		.53		.52	
F値	7.28**		26.16**		12.11**	

 β は標準偏回帰係数* $p < .05$ ** $p < .01$

表6 女性における「思いやり」、「自己愛」を目的変数とした重回帰分析

目的変数	思いやり		他者からの評価への過敏性		自己中心の主体性	
説明変数	β	t値	β	t値	β	t値
相互依存的甘え	.61	8.80**	.31	4.00**	*-.23	3.28**
屈折した甘え	*-.19	2.78**	.25	3.24**	.60	8.60**
決定係数 (R^2)	.37		.19		.37	
修正済み決定係数	.37		.17		.36	
重相関係数	.61		.43		.61	
F値	40.10**		15.22**		39.38**	

 β は標準偏回帰係数* $p < .05$ ** $p < .01$

に一方的に甘えることが不健康な「甘え」であるといえる。それは同時に、多元的「甘え」尺度が確かに「甘え」の二つの側面を測定できることを示唆している。

本研究では、「相互依存的甘え」と「思いやり」($r=.53$)、「屈折した甘え」と「自己中心的主体性」($r=.50$)とは特に密接な関係にあることが分かった。当初、「甘え」と関連する概念として思いやりと自己愛を取り上げたのは、「健康で素直な甘え」と「屈折した甘え」の根本的な違いが、「満足する主体が相手と自分の双方にあるか、自分だけにあるかの違いにある」と考えたからである。本研究の結果はこの考えを支持するものである。「健康で素直な甘え」は満足の主体が自分だけではなく相手側にもあるので、相手を信頼し、相手を思いやることができるものとなる。「屈折した甘え」は満足の主体が自分の側にあり、相手よりも自分が満足できるかどうかに関心が向けられている。実証的にこのような見解を示した先行研究は見あたらないので、この考え方は今後「甘え」の二つの側面を捉えていく上での参考となるであろう。

重回帰分析の結果から、人に素直に甘え、他者の「甘え」を受け入れるという「相互依存的甘え」は、思いやりや他者への信頼に影響を与えているとみなされる。逆に、うらむ、すねるなどの甘えや、自分は甘えたいが相手の甘えは受け入れないという一方的な甘えとしての「屈折した甘え」は、不信や自己愛に影響を与えているとみなされる。

次に、「相互依存的甘え」と「屈折した甘え」がともに「他者からの評価への過敏性」と正の相関が見られたことについては考察しておく必要がある。甘えは他者との関係を問題にしたものであり、総じて他者からの評価とは密接な関係があると思われる。素直に甘える場合であれ、素直に甘えを表現できない場合であれ、他者を意識していることに変わりはない。ただし、本研究の性差を考慮すれば次のようにいえる。男性の場合は「屈折した甘え」に限って他者を気にする傾向と結びついているが、女性の場合は素直に甘えが出せる場合でもそうでない場合でも他者からの評価を敏感に感じている。玉瀬・相原(2004)において、性格特性5因子(ビッグファイブ)のうち、神経症傾向だけが「相互依存的甘え」と「屈折した甘え」の両方と有意な正の相関が示されている。このことも類似した要因が含まれていることを暗示している。また、甘えが相互協調的自己感と結びついていること(玉瀬・岩室, 2004)も関連する問題を内包していると考えられる。これらのことを考え合わせると、甘えと他者への意識もしくは配慮がきわめて密接な関係にあり、甘えが強くなりすぎると他者からの評価を気にしすぎる傾向と結びつくのではないかと考えられる。

「他者からの評価への過敏性」は自己愛尺度の下位因

子であるが、一概に好ましくないとは言えない側面もっている。この因子の項目を見ると、「自分の噂ばなしは、適当に聞き流す」(R)、「他人からの批判にはぐさつとくる方だ」などがある。これらの項目内容は公的自意識(菅沼, 1984)と類似しており、公的自意識と「甘え」(良好な甘え)の関係は玉瀬・脇本(2003)ですでに実証されている。周囲の評価を気にするという傾向は過ぎると良くないが、対人関係上ある程度は必要な要因であるだろう。しかしながら、どの程度なら良くてどこからが病的になるのかといった目安は現時点では特定できない。

4. 2. 「相互依存的甘え」と思いやり

竹友(1988)は「甘え」と思いやりの関係について述べているが、実証的なものではない。北山・内田(1998)は本研究で用いた尺度を作成し、思いやり傾向の増加と共に向社会的行動傾向や他者からの援助を求める主観的頻度が増加するという結果を得ている。このような結果を「甘え」と関連づけて考えれば、向社会的行動は「甘え」を受け入れることに、他者からの援助を求める主観的頻度は素直に「甘え」を求めることにつながると考えられる。これはまさに「相互依存的甘え」の状態であり、このことから思いやりと「甘え」は密接につながっていると考えてよいであろう。

この両者の関係は、相互協調的自己観の文化という枠組みで捉えたとき、この文化に属する人間の良好な対人関係において相互作用的に進展すると考えられる。すなわち、相互依存的な「甘え」が思いやりにつながり、個人における思いやりの傾向が高まることから、さらに「甘え」の関係を築く上にも良い影響を与えると考えられる。本研究において示された「甘え」と思いやりの密接な関係は、相互協調的自己観の文化における「甘え」に関する理解を深めるのに役立つであろう。

ところで、本研究で使用した「思いやり」尺度はその項目内容が「情」に関わる項目で大半を占めている。思いやりに関わらず関係性やパーソナリティの概念には認知、感情、行動という三つの次元があると考えられる。この尺度では「思いやり」を実行に移すかどうかまでは十分に捉え切れていない。個人が思いやりの意識を確かにもっているとして、それは行動として表れなければ相手に伝わらず、行動に移して初めて思いやりであると考えられることもできる。

したがって、今後「甘え」と「思いやり」の関連を検討する上では、「思いやり」を実行に移すところまで測定することが必要であろう。このことは「甘え」と思いやりとの関係をさらに理解する上で意味があるといえよう。

4. 3. 「屈折した甘え」と自己愛

「甘え」と自己愛との関係については、土居自身の見

解（土居，1997）も含め、数多く指摘されてきた。自己愛にも「甘え」と同様に、「健康な自己愛」と「不健康な自己愛」という二つの次元がある。このうち一般的に連想される自己愛のイメージや、本研究で取り上げた自己愛は後者に相当する。岡田（1999）によれば、自己愛とは、「甘やかしや過剰な賞賛などによって、非現実的な誇大自己を固着させてしまったもの」である。誇大自己とは誇大的で顕示的な自己のイメージのことである。自己愛は、誇大自己と自分にとって都合のよい対象を万能の対象として内在化させた理想が満たされず、それらの非現実的な側面が固着してしまった状態であるとされている。DSM-IV-TR（APA/高橋他訳，2002）によれば、自己愛の特徴として、非現実的な誇大自己の他に、賞賛されたいという欲求、共感性の欠如などが挙げられている。特に共感性の欠如は人間的には未熟な状態であり、本研究での「屈折した甘え」を構成する「甘え歪曲」、「甘え拒絶」とつながる要素であると考えられる。

健康な自己愛は子どもの自尊感情や自己効力感につながり、自己に対する統制性を養うものになる。人間の内的成長という次元で考えたとき、「甘え」はその基本的な部分を形成し、自己愛は発展的な部分を形成するものと考えられる。それが健康的な方向に発展するか、不健康な方向に発展するかの違いは、「甘え」の質の違いによるところが大きいであろう。その結果が、個人におけるその後の「甘え」のあり方に影響を与えると考えられる。本研究で示唆された「屈折した甘え」と自己愛との関係は、「甘え」の不健康な側面を実証的に示したという点で意義があるといえる。

自己愛理論における誇大感と理想に関わる受容的な親の養育態度として、白波瀬（1993）は「子どもが示す甘えを満たしてあげることに専念するよりも、甘えを満たされ損なったときの子どもの気持ちをしっかり理解していることを子どもに伝えてあげることや、共にその気持ちを味わってあげることがとても大切」と述べている。これは甘えなくても甘えられない体験を子どもがしたとき、その子どもの気持ちに親が共感しつつも、一方でそのような場合も時としてあり得るということの現実を子どもに適切に伝えることの重要性を述べている。こういった親子関係は、土居の表現する「健康で素直な甘え」に基づく親子関係であるといえる。

本研究では「屈折した甘え」との関連から自己愛に焦点を当てたが、「甘え」と自己愛の関連をより深く捉えるためには、自己愛の健康的な側面にも焦点を当て、「相互依存的甘え」と「健康な自己愛」の関連についても検討していく必要があるかもしれない。

4. 5. 残された問題

4. 5. 1. 「甘え」と信頼感

信頼感については、谷（2000）が「甘え」との関連で取り上げた対人恐怖心性に対置する概念として検討したものである。土居（2001）は「健康で素直な甘え」の説明として、「健康な甘えというものは（中略）相互的な信頼に根ざして維持されるといってよい。信頼の基礎のない甘えはいわば浮き草のように頼りなく、気まぐれなものとなる」（p.95）と述べている。このような相互の信頼に根ざした「健康で素直な甘え」は、乳幼児期の母子関係において、母親の母性愛のもとに子どもが育まれるところに生まれる。つまり子どもが、「分離の事実を否定し、分離の痛みを止揚しよう」として母親に甘え、それを母親が受け入れるところから始まるといえる。本研究では「甘え」と信頼感との関係はある程度見られたが、思いやりや自己愛に比べると、必ずしも強い関係ではなかった。これは測定尺度として、もともと高校生で尺度化されたものを用いた点にも問題があるかもしれない。少なくとも本研究の結果からは、「甘え」には信頼感よりも思いやりや自己愛の要因がより強く関連しているといえる。

4. 5. 2. 甘えの性差

「甘え」の性差に関する先行研究では基本的に女性の方が高いという結果が多いが、性差が確認されていない研究もある。本研究では「相互依存的甘え」は男性よりも女性の方が高かったが、「屈折した甘え」では性差はなかった。篠原・原崎（1999）も本研究と類似の結果を報告している。外山・高木（1991）では、①女性の方が男性よりも甘え欲求が有意に強く、②女性は甘える対象が自らをより受け入れてくれると期待しており、③「甘え」に関する価値観を女性のほうが肯定的に捉えていること、④男性は「甘え」に対して抵抗感が強いこと、を見出している。このことについて、外山（1993）は社会的にも女性の方が「甘え」を表出することが男性よりも許されている点を指摘している。この背景にはジェンダーの問題があろう。逆に男性は女性よりも自立や独立を促されやすく、頼るというニュアンスを含む他者との関わり方は好ましくないとされやすい。つまり依存というニュアンスをもつ「甘え」に対しても女性より否定的であり、抵抗感が強い。このようなことから女性の方が総じて「甘え」意識が高いのであろう。

これらのことをふまえると、重回帰分析における男女別の傾向も了解し得る結果であるといえる。「他者からの評価への過敏性」について、男性では「屈折した甘え」とのみ強固な因果関係があるのに対し、女性では「相互依存的甘え」、「屈折した甘え」の両方と関係が見られた。これは女性の方が男性よりも「甘え」の質の違いに関わらず、周囲の評価を気にしやすいことを示している。

4. 5. 3. 「甘え」尺度の問題

本研究では「甘え希求」因子の負荷量が他の因子にまたがる傾向が見られたので、追加項目を用いて修正を加えざるを得なかった。このことは、この尺度が必ずしもまだ安定した尺度にはなっていないことを示唆している。2つの下位因子を合わせた「相互依存的甘え」と「屈折した甘え」に関しては、それぞれ下位因子との相関も高く、 α 係数も高いので、このレベルでの分析については問題ないものと考えられる。しかし、より適切に「甘え」を測定するために、さらに尺度を改良していくことが必要であるといえる。

5. 要約と結論

土居（1971）によって理論化された「甘え」に関する従来の諸研究を概観し、甘えを実証的に研究するために開発された玉瀬・相原（2004）の尺度を再検討した。若干の項目を差し替えることを余儀なくされたが、「甘え希求」「甘え受容」「甘え歪曲」「甘え拒絶」の4因子は確認された。これらのうち、希求と受容は「相互依存的甘え」（ $\alpha = .80$ ）を構成し、歪曲と拒絶は「屈折した甘え」（ $\alpha = .79$ ）を構成している。これらは土居（2001）の「素直な甘え」と「屈折した甘え」に対応するものとみなされた。大学生を用いた結果から、「相互依存的甘え」は「思いやり」と相関があり（ $r = .53$ ）、「屈折した甘え」は自己愛尺度の「自己中心的主体性」と相関があった（ $r = .50$ ）。重回帰分析の結果、「思いやり」は「相互依存的甘え」によってかなり説明でき（ $\beta = .49$ ）、「自己中心的主体性」は「屈折した甘え」によってかなり説明できる（ $\beta = .53$ ）ことが示された。これらの結果は、土居理論の裏付け資料となりうるものである。また、これらの結果は北山・宮本（2000）のいう相互協調的自己観をもつ文化に適合しているとみなされる。

引用文献

- 天貝由美子 1995 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響
教育心理学研究 43, 364-371.
- American Psychiatric Association/高橋三郎・大野裕・染矢俊幸(訳) 2002 DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル
医学書院
- 長恵枝 2002 母子間の「甘え」「甘やかし」と対人恐怖心性
日本教育心理学会第44回総会発表論文集 p.144.
- 土居健郎 1971 「甘え」の構造 弘文堂
- 土居健郎 1985 「表と裏」 弘文堂
- 土居健郎 1997 「甘え」理論と精神分析療法 金剛出版
- 土居健郎 1998 「甘え」と「妬み」 児童心理 5月号 特集
・甘やかされている子 金子書房, 1-11.
- 土居健郎 2001 続「甘え」の構造 弘文堂
- 藤原武弘・黒川正流 1981 対人関係における「甘え」についての実証的研究 実験社会心理学研究 21, 1, 53-61.
- 一ノ瀬壽和・高木秀明 2002 自己愛に関する理論と諸問題
横浜国立大学大学院教育学研究科 教育相談・支援総合センター紀要 1, 43-54.
- 一ノ瀬壽和・高木秀明 2003 友人の存在及び被承認感と誇大感の関連 横浜国立大学大学院教育学研究科 教育相談・支援総合センター紀要 2, 61-73.
- 李御寧 1982 「縮み」志向の日本人 学生社
- Kato, K. 1995 Empirical studies of amae interactions in Japanese and American adults: Constructing relational models and testing the hypotheses of university. (UMI Microform 542870, Ann Arbor, MI: UMI Company)
- 北山修(編) 1999 日本語臨床3 「甘え」について考える
聖和書店
- 北山忍・唐澤真弓 1995 自己：文化心理学的視座 実験社会心理学研究 35, 2, 133-163.
- 北山忍・宮本百合 2000 文化心理学と洋の東西の巨視的比較—現代的意義と実証的知見— 心理学評論 67, 4, 308-313.
- 北山忍・内田由紀子 1998 日本的自己と相互思いやりの人間関係—尺度作成と仮説の検証— 日本グループ・ダイナミックス学会第46回大会発表論文集, 270-271.
- Markus, H.R. & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review* 98, 2, 224-253.
- 岡田努 1999 現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について 立教大学教職研究 9, 21-31.
- 大元誠 1985 青年期における「甘え」観と発達課題 広島大学教育学部紀要 1, 34, 225-253.
- 小塩真司 1997 自己愛傾向の二側面に関する検討—3つの自己愛尺度を用いて— 教育心理学論集 27, 19-32.
- 篠原しのぶ 1997 日本及び中国における青年男女の「甘え」に関する調査研究 福岡女学院大学紀要 7, 167-193.
- 篠原しのぶ・原崎聖子 1999 青年の甘えと社会的適応に関する調査研究 福岡女学院大学人文学研究紀要 人文学研究 2, 173-199.
- 篠原しのぶ・原崎聖子 2000 青年の甘えと社会的適応に関する調査研究Ⅱ 福岡女学院大学紀要 人間関係学部編 創刊号, 61-68.
- 篠原しのぶ・原崎聖子 2001 青年の甘えと社会的適応に関する調査研究Ⅲ 福岡女学院大学紀要 人間関係学部編 2, 35-43.
- 篠原しのぶ・原崎聖子 2002 青年の甘えと社会的適応に関する発達心理学的調査研究 福岡女学院大学紀要 人間関係学部編 3, 61-69.
- 篠原しのぶ・原崎聖子 2002 青年の甘えと社会的適応に関する教育心理学的調査研究Ⅱ—日本・中国学生の比較を中心に— 福岡女学院大学紀要 人間関係学部編 4, 29-35.
- 白波瀬丈一郎 1993 「甘える子」の心理 児童心理12月号 特集・甘える子 金子書房, 1-8.
- 菅沼健介 1984 自己意識 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, 55(3), 184-188.
- 高松雄太・加藤和生 2001 「甘え」, 「甘える」, 「甘えさせる」とは何か?—素朴概念の分析を通して— 九州大学心理学研究 2, 159-167.
- 竹友安彦 1988 メタ言語としての「甘え」 思想 768, 123-125.
- 竹友安彦 1999 「対人行動的甘え」と「精神的甘え」—日常語「甘え」の延長にある精神分析術語「甘え」の問題— 北山修(編) 日本語臨床3 「甘え」について考える 聖和書店, 47-64.
- 玉瀬耕治 2003 留学生と日本人学生の「甘え」の比較 日本

- カウンセリング学会第36回大会発表論文集 p189.
- 玉瀬耕治・相原和雄 2004 大学生の「甘え」と特性5因子との関係 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要13, 23-31.
- 玉瀬耕治・岩室暖佳 2004 関係性の維持と個の主張に関わる問題－「甘え」とアサーションを指標として－ 奈良教育大学紀要 53 (1), 37-45.
- 玉瀬耕治・脇本真希子 2003 大学生用「甘え」尺度の作成に関する研究 奈良教育大学紀要 52 (1), 209-219.
- 田村富美代・小川捷之 1989 自己受容と対人関係－自己受容尺度と「甘え言語連想検査」－横浜国立大学教育紀要 第29集 87-103.
- 谷冬彦 2000 青年期における「甘え」の構造 相模女子大学大学院研究紀要 63A,1-8.
- 外山嘉奈子 1993 パーソナリティとしての「甘え」 児童心理12月号 特集・甘える子 金子書房, 16-22.
- 外山嘉奈子・高木秀明 1991 青年期の「甘え」の心理に関する一研究－「困った」場面の分析を通して－ 横浜国立大学教育紀要 31, 79-103.
- 内田亜紀子 1998 大学生の「気がね」に関する研究 群馬大学教育実践研究 15, 271-284.
- 内田由紀子・北山忍 2001 思いやり尺度の作成と妥当性の検討 心理学研究 72 (4), 275-282.
- 山口勲 1999 日常語としての「甘え」から考える 北山修(編) 日本語臨床3 「甘え」について考える 聖和書店, 31-46.

